

「利他性」の科学的取り扱い

内田智士（倫理研究所研究員）

はじめに

科学の分野で、「利他性」が話題になっている。例えば、科学雑誌のなかで最も権威ある雑誌である「サイエンス」は2005年に、21世紀に人類が解かなければならない課題として25個のテーマを提示した。その中には、「どのようにして助け合いは生まれるのか」という問いが含まれている。「助け合い・利他性・奉仕」の問題は、科学のさまざまな分野で重要なトピックスとなっているからである。

例えば進化生物学では従来、進化の過程は突然変異という変化と、適者生存や自然淘汰という圧力により駆動されてきたと言われていた。これらは、競争の原理を基礎とするものである。突然変異により変化をし、その変化が良い方向のもので、他の生物を出し抜いた生物が進化の過程で生き残るという論理である。

しかし最近では、生物進化には利他性が大きくかかわってきたことが分かってきている。進化の過程を説明するには、変化と利己的な競争圧力だけでなく、「利他性」というもうひとつの新しい要素が必要なのではないかと言われているのである。

経済学でも利他性が一つのトピックスとなっている。従来の経済学では、個人は自分の利潤を最大化する目的で行動をするということが仮定されていた。例えば金銭というものを欲しがるのは、個人が自分の欲望を満たすためだと考えられていた。

ところが、金銭というものが発生した歴史的なプロセスやメカニズムを考えると、人のつながりを強固にするような使い方をすべきである、ということが言われているのである。また、いわゆる行動経済学においては、個人を完全に利己的で合理的な経済人としてモデル化するのではなく、人間は利他的な側面も持つということ認識し、そのことによって従来の経済理論をさらに現実に近づけようとする試みがなされている。さらに利他性を前面に出したものとして、「利他性の経済学」や「公益資本主義」というものが唱えられている。

社会学も同様である。人間というものは「自然状態」（社会的・政治的な関係を持たない“なま”の状態）では、利己的になると思われてきた。そのような状態では、人々は競合し、いわば万人の万人に対する闘争というような状況が実現すると思われてきたのである。

自然状態に陥りやすいのが、破局的な災害である。災害地では、警察や法律というような社会的な機能が停止するからである。したがって災害が起こると、災害地では生存競争が始まり、そのため暴動や略奪などの血で血を洗うようなホップズ的狀況に陥るとイメージされてきた。今でもそのように感じる人も多いであろう。しかし最近になって、実はその逆だということが分かってきた。災害地のような自然状態に近いほど、人々は利他的に振る舞うのである。

本稿では、以上のような状況をふまえ、利他性について科学的に知られていることをまとめる。第2章では、利他性を理論的に説明する従来の試みについて述べ、その背景には「与えたものは還ってくる」という発想があること、また特に理論分野では利他心には触れられず、行為に焦点が当てられていることを見る。第3章と第4章では、外面に現れる行為が同じであっても、行為を行うときの心境によって結果が変わりうることを、実験や観察結果から確認する。第5章では、これまでの理論的な取り扱いが困難である利他行為が、実験において観察されることを見る。最後の第6章を、まとめにあてる。